

平成十七年歌会始御製御歌及び詠進歌

歩み

御製

戦なき世を歩みきて思ひ出づかの難き日を生きし人々

皇后陛下御歌

風通ふあしたの小径歩みゆく癒えざるも君清しくまして

皇太子殿下

頂きにたどる尾根道ふりかへりわがかさね来し歩み思へり

皇太子妃殿下

紅葉ふかき園生の道を親子三人なごみ歩めば心癒えゆく

文仁親王殿下

頂へ登り行く道歩みとめ山高く咲く花を愛でたり

文仁親王妃紀子殿下

みちびかれ富良野の森を歩む子ら高だかとのびし木々におどろく

清子内親王殿下

新しき一日をけふも重ねたまふたゆまずましし長き御歩み

正仁親王殿下

夏の日に那須高原の木々の間を歩みてゆけばえぞぜみの鳴く

正仁親王妃華子殿下

熱き日のオリーブ林歩みきてアクロポリスの丘にたたずむ

崇仁親王妃百合子殿下

をさな子は歩みたしかなりゆきてはづむが如く青芝を行く

寛仁親王妃信子殿下

もみぢ濃き雲場の池のほとり歩む秋の陽ざしのしづかなる午后

彬子女王殿下

春雨に濡るる目白の桜のみち友と新しき歩み踏み出す

憲仁親王妃久子殿下

わが歩みみちびきませと夫の宮に日々ねがひつつ二年を経ぬ

御製

戦なき世を歩みきて思ひ出づかの難き日を生きし人々

本年は終戦六十年をむかえるが、この御製は、六十年前、さきの大戦のために筆舌に尽くしがたい苦難の日々を生きた人々に思いを馳せて詠まれたものです。

皇后陛下御歌

風通ふあしたの小径歩みゆく癒えざるも君清しくまして

夏の朝、ご散策の小径で涼風を感じられた喜びと、完治はなさらずとも、清やかに歩まれる陛下のお姿に、平安を感じておられるお気持ちを合わせてお詠みになっています。

皇太子殿下

頂きにたどる尾根道ふりかへりわがかさね来し歩み思へり

皇太子殿下には、山をこよなく愛していらつしやいます。山頂に立たれた時、額に汗し一步一步辿られた登山道、その疲れを癒す花々や鳥のさえずりなど、ご登山の苦労や楽しみをかみしめられ、あわせてご自身のこれまで歩んでこられた人生の歩みに思いを馳せながら、お詠みになったものです。

皇太子妃殿下

紅葉ふかき園生の道を親子三人なごみ歩めば心癒えゆく

深まり行く秋の午後、美しく色づいた紅葉の赤坂御用地を三殿下で
ご散策にられました。

歩みの一歩一歩の中に、皇太子殿下、内親王殿下と共におられる和
やかな、静かな幸せに心安らいでいかれるお気持ちを詠みになりま
した。

特に、妃殿下には、この一年余り、皇太子殿下よりのお心温かいお
力添えと内親王殿下のお健やかなご成長に支えられて、徐々に心身のお
力を回復なさってこられたことに思いを新たにされ、深い感謝のお
気持ちをこめてお詠みになったお歌です。

文仁親王殿下

頂へ登り行く道歩みとめ山高く咲く花を愛でたり

昨年（平成十六年）の八月、秋篠宮殿下は、ご家族で北海道の富良
野市にある東京大学の附属演習林で四日間を過ごされました。

ご滞在中、敷地内にある大麓山に登られ、山に生えている高山植物
をお楽しみになる機会を持たれ、その折の様子を想い出しながらこの
歌を詠まれたものです。

文仁親王妃紀子殿下

みちびかれ富良野の森を歩む子ら高だかとのびし木々におどろく

昨年（平成十六年）の八月、秋篠宮妃殿下は、ご家族で北海道の富
良野市にある東京大学の附属演習林で四日間を過ごされました。

ご滞在中、眞子内親王殿下、佳子内親王殿下は職員のご案内で、同年
代の子供たちと一緒に歩きながら、演習林内の様々な木々の名前を覚

えられ、豊かな自然に親しまれました。妃殿下には、その折、大きく成長する木々を見上げた子供たちが感動する様子を想い出しながらこの歌を詠まれたものです。

清子内親王殿下

新しき一日^{ひとひ}をけふも重ねたまふたゆまずましし長き御歩^{みあゆ}み

今日もまたその日のお努めを始められる両陛下のお姿にお接しになりながら、変わりなくご公務をお続けになり、人々の上を思われる日々を重ねてこられた両陛下の、長い御歩みに思いを馳せられ、お詠みになったお歌です。

正仁親王殿下

夏の日^{あつ}に那須高原の木々の間を歩みてゆけばえぞぜみの鳴く

正仁親王妃華子殿下

熱き日^{あつ}のオリーブ林歩みきてアクロポリスの丘にたたずむ

崇仁親王妃百合子殿下

をさな子は歩みたしかになりゆきてはづむが如く青芝を行く

我が子の成長を思い出され、詠まれたお歌です。

寛仁親王妃信子殿下^{ともひと}

もみぢ濃き雲場の池のほとり歩む秋の陽ざしのしづかなる午后

秋の軽井沢でご静養の折、雲場の池をご散策中にお詠みになられた
お歌です。

彬子女王殿下

春雨に濡るる目白の桜のみち友と新しき歩み踏み出す

あいにくの雨模様となった大学の卒業式の折、四年間、ともに学ん
できたご友人と四月からはそれぞれ別の道を歩き出されることを心に
留められ詠まれたお歌です。

憲仁親王妃久子殿下

わが歩みみちびきませと夫の宮に日々ねがひつつ二年を経ぬ^{ふたとせ}

召人 渡邊弘一郎

老の歩みとどめて仰ぐ朝の空いまこの思ひを大切ににして

選者 安永露子

冬の空ことなく晴れて北を指すひとり歩みも白雲はくうんのした

選者 岡野弘彦

谷ふかく人歩み入る道みえてふるさとの山の春しづかなり

選者 岡井 隆

微笑みてわれを待つ人のあるごとし歩幅大きく朝の道ゆく

選者 永田和宏

ゆつたりと風の歩みの見えながら岬に遠き風車がまはる

選 歌 (詠進者生年月日順)

ブラジル国
パラ州 原田清子

アマゾンに七十年の我が歩み大早おほひでりに遭ひ洪水に遭ふ

熊本県 穴井京司

病室を歩む足音ひそやかに歪む毛布を叩きて去れり

長野県 川上みよ子

少しづつ歩幅を拡げ歩みをりけふはマロニエの咲く道に来ぬ

長野県 丸山健三

稲妻の照らす棚田を水洩れの音探りては父と歩みき

長野県 木内重秋

雪とけて塗りかへられし白線の横断歩道を子ら渡りゆく

山口県 森元英子

手話交はず少女二人が図書館車に紋白蝶と歩みくるなり

山梨県 深澤完興

をとりとも友とも書きて鮎を売る灯暗き村に歩み入りにき

鹿児島県 室之園てるみ

ゆるやかなリズム刻みて里川の水の歩幅に水車は回る

福島県 森 源子

立ちもせず歩きもしない吾が足を物の如くに引き寄せるなり

大阪府 中田久美子

いつもよりゆつくり歩く帰り道二人の影がだんだんのびる

佳 作 (詠進者生年月日順)

兵庫県 鈴木ミヨ子

ながらへて何をなせとぞ思し召すせめて二三歩あゆませ給へ

静岡県 長野行雄

立ち上り始めて歩むこの一步主治医の肩に両手のばして

福岡県 福田桂一

この夕べ黄砂降る町に歩みきて人を占ふわが生きむため

長野県 下澤わかゑ

今まさに生れし子馬はゆるやかに立ちて一二歩あゆみ初めにき

福岡県 平井達志

母牛の歩む乳房にすがりつつ子牛は白き泡吹かせ飲む

愛知県 磯貝正温

かたくなの我を支へて歩みこし妻の大きく見ゆるこのごろ

京都府 田中利枝
腕くみて歩むことなどなき夫と手を取り合ひて歩みてみたき

愛知県 佐藤登喜雄
朝靄の果てにドナウの水ひかる岸歩みゆくあまた乳牛

埼玉県 豊田登代子
夕焼のこんなに美しき道なれば横一列に歩いてみたい

埼玉県 西尾喜代子
アムゼルの鳴く川岸を歩きゆくこの囀りを君は教へき

和歌山県 秀 清子
百三歳の小さき母の手を握り同じ歩幅に坂道のぼる

兵庫県 吉原美佐子
歩けたよ角まで行つたとたんぽぼの大きさの字で母の文来る

大阪府 西村芳裕
僕は今迷ひながらも歩んでる光差し込む出口探して

群馬県 天野莉那
お母さんお母さんてばお母さん影ふみ歩き明日も天気